



遠花火

とおはなび

伊藤桂一

毎日新聞社

遠花火



毎日新聞社

遠花火^{とおはなび}

一九九三年八月一〇日
一九九三年九月二〇日

第一刷
第二刷

著者 伊藤桂一

編集人 吉田俊平

発行人 田中正延

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇五 東京都千代田区一ツ橋

〒五〇〇五 大阪市北区梅田

〒八〇三 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版

製本 大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえます。

© Keiichi Itou Printed in Japan 1993
ISBN4-620-10477-9

遠
花
火

目
次

遠 花 火	7	絵 馬 の 女	23	萩 の 咲 く 道	28	落 雀 の 賦	49	因 幡 の 兎	74	いつか、その日を
-------------	---	------------------	----	-----------------------	----	------------------	----	------------------	----	----------

崖の石蘭

111

菜の花月夜

129

牡丹の咲くころ

154

死神剣法

180

狐の嫁入り

204

装幀 倉橋三郎

遠
花
火
(とおはなび)

遠 花 火

陰曆八月十五日、深川富岡八幡の祭礼で前晩の宵宮から、界限は活気づく。どこを歩いて、祭まつり囃子の音がきこえる。町々には幟のぼりが立ち、神酒所をはじめ、どの家も提灯ちようどんや飾り物で彩られる。

当日は、各町内から、趣向を凝こらした山車だしが出るし、江戸じゅうの人たちがみな集まってきたのかと思われるほどの、賑わいとなる。

その、宵宮の日の夜。黒江町は「花むら」という料亭の女中のお里が、厠かわやへ行くために、客と寝ていた座敷を出て廊下を歩いてゆくと、うしろから、お光という姉さん株の女が追ってきて、お里の背を押すようにして、一緒に厠の戸をあけて中にはいり、

「お里さん、ゆっくり話してるひまはない。あすの宵に、うちの前をこの町の山車が通るから、それを見に表へ出るふりをして、そのまま、この店からお逃げ。あたしが一緒に、船着場まで行ってあげる。着のみ着のままでいいんだ。万事、あたしが手配をしてあげてる。いいね、好きな人と添えるかどうかの、一生一度の賭けだからね。あたしが声をかけたら、一緒に店を出るのよ」

それだけを、お里の耳に口をよせて早口にいうと、お光は、お里の肩を叩いてから、厠を出て行っ

た。

お里は、お光の言葉をききながら、身体が小刻みにふるえてきて、しゃがんだ時、いくらか小水を洩らしてしまっているのに気づいた。たしかにこれは、一生に一度の、いのちがけの賭けということになる。

花むら——は、表向きは料亭だが、深川界限の岡場所なみの遊びをさせている店で、その筋には充分な鼻薬をきかせているから、少々のことではお咎めはない。

女は、下働きも入れて十数人いるから、宴会があっても、手の廻らぬということはない。宴席で、泊まり客をみつけておくのも、この店の女たちの仕事になっている。客の気をひくため、衣裳や化粧品には、格別に金をかけているが、店は、むろん、そのかかりの何倍かを、女の借財にくり入れてしまふ。

この店では、板前から、庭掃きの下男まで、主人の儀作の息がかかっていて、いわば、親分子分の盃を交わしている関係である。男はだれもが、女たちの見張り役をつとめる。土地の岡っ引や、地廻りの若い奴らにも応分に手が打ってあって、かりに女が逃げても、雑作もなく捕まるようになっていく。ただ、捕まえても折檻はしない。売り物に疵はつけられないからである。その代り、年期がどこまでものびてゆく。

お里は、結城の在の貧農の娘で、器量がよかったから、十二両の値がついて、この店へ売られてきた。女衞の話では、料理屋の楽な女中奉公だ、ということだったが、女中奉公だけですまないことは、世間知らずのお里にも、それとなしに、わかつてはいた。だが、店の扱いは、思いのほかにひどかった。

店へ来たつぎの日の晩は、主人の儀作に女にされたし、そのあとは顧客筋の旦那衆が何人か客に來た。あとはほかの女たちと同様、店に出て客の相手をする。

客をとらされるについて、なにかと世話をしてくれたのは、お光である。お光は、この店のいちばん古手で、客もとるが、店の女たちの頭株として世話もする。

「女衞からお金もらった時に、もうあんたの運は尽きてるのよ。あとは、客をとりながら、その客の中に、神さまみたいな人がいるかどうか、あんたのもひとつの運のわかれ目だね。そんなひとなんて、千に一つの当り籤くじみたいのに、いやしない。あとは、あんたを踏みつぶしてゆく男ばかりさ。でも、泣いてばかりじゃいけない、待つよ。生きてる限りはね。あきらめないこと。この店は、妓楼きろうと違って、廻しをとったりはしないから、それだけ身体は楽かもしれない。これからは、なんでも、あたしに相談をなさい」

お光は、男との色ごとのしぐさまで、手をとって教えてくれている。

お里は、化粧をしなくても宴席に出られるほどの器量だったし、だから客もよくついて、お茶を引く、ということもまるでなかった。それだけに、つとめもつらく、はじめのひと月などは、全身が血みどろになるような思いをしたが、お光に励まされて、ふた月三月とたつうちに、店での暮らしにも、それなりに馴れてくる。

たぶん、何年も、この生き地獄からはぬけられまい、と気づいたのも、この店での、暮らしに馴れてからである。一步も外に出られないし、出る時は、見張りがたがたのお供がつく。主人の儀作は、金貸しもやっていて、貸金の取り立て人という、人相の悪い男たちも、何人かは店に出入りする。女たちは、身体があいていると、その男たちを、身体でもてなす仕事もしなければならぬ。

表向きは料亭だから、飯を食いに来る客もいるし、ゆきずりの旅びとが、昼飯を食いに来ても、上げて、なにがしかの料理は出す。その客が、女のもてなしや口説くぜつがよくて、そのまま居つづけて、泊まってゆくこともある。

お里が、この店で、一年余りつとめたある日に、木更津の漁師で、清吉という三十ばかりの男が、網元の用事で深川へ来て、ひょっくりと店に寄っている。夕方近くで、お里が、店の前庭を掃く手伝いをしてゐる時に、声をかけられた。

「姐さん。腹空いとるだが、飯食わしてくれんかね。江戸へ行ったら、めずらしいもん食うてこい、といわれてきた。もつとも、あまり値が高いようじゃ考えなきやならねえが。ここはりっぱな店だし、姐さんは器量よしだし、ちよいと声をかけてみたくなつてね。わしらは、足のふとい、男みてえな海女あまばかりみて暮らしてるからね、江戸の水に洗われてる女をみると、ふるえがきそうだね」

と、清吉は、漁師らしい、さっぱりとした口ぶりで、そういった。

お里は、ひと目で、

（このひとは、いいひとだな）

と、男の人柄をみた。入れ揚げてみようか、ひと晩きりの縁になるかもしれないけれど——と、胸のうちに思い、そこは、物馴れたふりで清吉を誘って、酒肴しゅこうをもてなし、その夜は泊めて、ともに寝た。

入れ揚げる、というのは、男に金がなければ自分の借財でたてかえて、男との縁を深めることができる。網元の使いでは、清吉がさしたる小遣い銭を持っているのでないことは、その身なりをみても

わかる。

「好きな客が来たら、入れ揚げて、自分もたのしみな。どうせあたしら、宿場の飯盛女なみの、行先当てどない稼業だしね。ひと晩でも、嬉し泣きに泣けたらねえ」

と、これは、お光が、ある時、いったことである。もっとも、その時は、お光は客相手に飲んで酔ってはいたが、それだけに本音であつたともいえる。

清吉は、漁師町の料理とは、ともかくひと味違うものを食べさせてもらい、あわせて、自分の小遣い銭で泊めてもらい、その上、お里の、情のこもった聞きこのもてなしをうけ、あまりの嬉しさに、

「これでは、竜宮へ来たようなものだで」

と、お里の耳に、しきりに訴えたのも無理はない。

「こんなことをいうて、笑われるかもしれないが、姐さん、わしと一緒になつてはくれんかね。わしはしがない漁師だが、おふくろとふたりで、堅い暮らしをしている。暮らしに困るようなことはない。姐さんが、この店で客をとるよりは、まだしもしあわせかしかない。必ず、しあわせにしてみせる。考えてみてくれんかね。わしは親方に相談して、少々の身請金なら、都合して借りてくることもできるんだが」

清吉は、ひと晩の、肉の営みの合間の語り草に、お里の身の上も充分にきいたし、それで、そういつてくれたのである。朴訥ぼくちやうな男らしく、むきになって口説いてくる。しかし、お里が、この稼業から足を洗うとなれば、店は法外な金を吹っかけるだろう、網元が、清吉に貸してくれる程度のお金では、とうてい、間に合うはずはない。

「嬉しいことを、いつてくださいました。あたしも、お客さんみたいな、実直な人は好きです。海べ

りに流れつく、若布や昆布こんぶを拾って食べる暮らししかできなくなつて、この稼業よりはずつとしあわせなんです。まして、お客さんと一緒になれるなら。——でも、だめでしょうねえ。ここはね、底無し沼みたいな暮らしで、少々のお金では、身請なんか、させてくれはしません」

お里は、正直に、見込みのないことを話したが、

「だが、十二両の金で買われて来たんだらう」

と、清吉は単純に計算して、帰りぎわに、帳場で、話をしたらしいが、店先へ送って出たお里に、青ざめた顔をして別れをいったあと、

「またくるよ。なんとかしてな。わしはあきらめない。わしはあんたが、ひと晩で、しんそこ好きになった。これだけは、ほんとうだ。でも、身請の金は、百五十両といわれたんだ」

と、いい残し、寂しげな背をみせて、帰って行った。

富岡八幡の祭礼は、永代橋を境にして、江東、江西の各町から、それぞれに趣向を凝らした練物が出る。練物というのは、石清水神事供奉ぐさの行列を模したり、花見帰りに見立てて、姫君や腰元にお付の徒士かちがさまざまな衣装でつづいたり、大津絵の曳き物に伊勢音頭の行列がついたり——といった次第で、界限は道も満足に歩けぬほどの賑わいになる。

黒江町は、桃太郎鬼退治の曳き物を出して、曳かれる男女の鬼たちの趣向も面白く、この行列が動き出すと、町家の人たちはみな表へ出て、ひしめきあって、口々に声をかける。

宵の口に、その行列が「花むら」の前へさしかかった時に、お光は、

「お練りだ、お練りだ、ちよいと、みせてもらおうよ、お里ちゃん。あたしのいいひとが、青鬼で出

てるんだよ」

と、店の中で、大声をあげてお里を呼び、お里の手をとるようにして、座敷から引き出し、表へ出る。まわりが、わっと沸き立っている。その人波の中へ、お光はお里の手を曳いて出ると、そのまま人波の中を、揉まれて歩き出す。

「さあ、この手を離すんじゃないよ」

と、お光はうしろにつくお里にいい、けんめいに人波をぬけながら、じきに掘割沿いの道に出ると、ここらは人影もうすれる。先を急いで、大島橋のほとりまで行きつくと、橋ぎわに、小舟が一隻、とまっていた。

「源さん、たのむよ、よろしくね」

と、お光が声をかけると、

「あいよ」

と、返事がくる。お光は、

「船賃だよ」

といって、ふところからとり出した包みを船のほうに投げ、それから別な包みをお里に渡して、「お里ちゃん、もう大丈夫だ、これは当座暮らせるお金だよ、これを持ってお逃げ。そうして、しあわせにおなり。この船頭さんは、源次さんといって、あたしのだいじな人だった。悪いようにはしない。なんでもお頼み。あんた、どうせ、死ぬつもりだったんだろ？ それなら死んだつもりでお逃げ。なんともなわ。なんともならなかったら、その時に死ねばいい。早くしないと追手がさがし出す。わけはきかなくなつていい、さ、さ、早く」

